

ナクソス島の村落共同体

——フィロティイ村の放牧共有地を素材に——

松 木 栄 三

1

現代ギリシャの全土はディモス (dēmos) (市およびキノティス (kōmētes) (村という二種類の地方自治体に区分されている。一九七一年センサスによれば、全ギリシャのディモス数は二五六、キノティス数は五、八〇五である。⁽¹⁾ これらの上にエパルヒア (eparchia) (郡、さらにその上にノモス (nomos) (県という行政区分がある。首都圏と聖アトス山を除く全土は五二県に分けられ、各県は数郡を含んでいる。郡は若干のサービス機能を備える以外に行政区としての実質を伴わないのにたいし、県は広範な機能と権限をもつ最重要な行政区であるが、国の

任命になる県知事 (eparchis) (ἐπαρχὴς) が行政を担当していて実質上は中央政府の地方機関にすぎない。結局、住民選挙による地方議会や独自の首長をもつ自治体としては、ディモスとキノティスがあるだけである。われわれが二カ月半の現地調査の対象として選んだフィロティイ村は、そうした現代ギリシャのキノティスの一つである。

フィロティイ村は、エーゲ海南部に位置するキラダス諸島中最大の島ナクソスにある。キラダス諸島は大小二一の島々で一つの県をなし、シロス島のエルムポリス (人口一三、五〇〇) を県都とし、八つの郡に区分され、六ディモスと一一四キノティスをかかえている。ナクソスは全島が一つの郡をなし、一ディモスと二キノ

ティスから構成されている。ピレウスから八時間の船旅で、島の唯一の港町であり首邑でもあるナクソス市（人口三、〇五五）に着く。フィロティはこの町から一九キロ、バスで四〇分あまり、島の最高峯ザー山山麓の標高四〇〇メートルほどにある山間の村である。一九七一年のセンサスで人口一、四七五、調査時の一九七七年には一、一〇〇前後に減少していたが、それでもナクソス最大の人口をもつキノティスである。

キノティスとは文字通りには commune の意味である。現代のキノティスがなお一つの自治体として公認されている根拠は、それが伝統的な村落共同体を基礎にしているからであろう。歴史家の指摘によれば、ギリシャの村落共同体が自治体として最も高度に成熟したのは独立革命に先だつトルコ支配の時代だった。トルコ人の異民族支配の形態とも関連して、ギリシャ人村落は財政、教育、宗教、司法にわたる広範な自治機能を備える団体として発展した。エーゲ海の島々や山間僻地にはトルコ人の数も少なく、彼らは貢納を取る以外に日常的統治を充分果たしていなかったから、共同体の機能は一層つよめられたといわれている。

ナクソス島にも一七世紀以来三つの自治的共同体（*ko*）がトルコ権力に公認されており、そのうちの一つは島の二〇ほどの村々が連合して形成していたのである。

多分、フィロティ村もその連合に加わっていたであろう。いずれにせよ、村落共同体としてのフィロティ村はトルコ支配時代にはすでに何らかの形で存在し、現在のキノティスを構成する素材のいくつかを準備していたにちがいない。現代ギリシャのキノティスは、歴史的に形成されていたそのような村落共同体を近代国家が最小の行政単位として編成したものにほかならない。

それゆえ現在のキノティスにも、伝統的な村落共同体に歴史的起源をもつくつかの側面なり要素なりを見ることが出来る。フィロティについていえば次のような諸点が指摘できるだろう。

第一に、キノティスは独自の予算と公吏をもち、住民投票で選出される独自の村議会（*synagoria*）と村長（*protopos*）によって運営される農村自治体である。第二に、キノティスはまた村の守護聖者をまつる教区教会と一人の司祭（*pater*）を中心とするギリシャ正教の教区であり、村人の宗教生活上の共同団体である。第三に、

ギリシャ村落が伝統的に村民の教育を共同体事業として重視してきた歴史的背景のゆえに、キノティスは必ず一つの小学校を持ち、村人の子弟の教育を行なう初等教育の地域的単位にもなっている。⁽⁶⁾ 第四に、村は集村をなし村人の畑や放牧地の大部分は村の行政領域内に存在しているのであるから、キノティスはまた当然、生活と生産の場を共通にする人々の地縁的集団でもある。⁽⁷⁾ 第五に、フィロティのように大きな村は一つの多少とも完結した婚姻圏をなし他村との通婚が限られているから、キノティスはまたかなり血縁関係の濃い人々の集団にもなっている。⁽⁸⁾

だがフィロティ村の生活と生産活動のあり方から見て非常に重要な第六の側面は、このキノティスが広い行政領域内に沢山の山岳放牧地を所有し管理する共有地所有主体だという点である。フィロティは住民の職業構成からいっても農産物や収入源の比重からいっても牧畜的な村であるが、住民世帯の相当部分を占める農牧夫たちの生活は、まさにそうしたキノティス共有地での山羊や羊の放牧によって成り立っているからである。以下フィロティ滞在中に得たいくつかの調査資料をもとに、この村

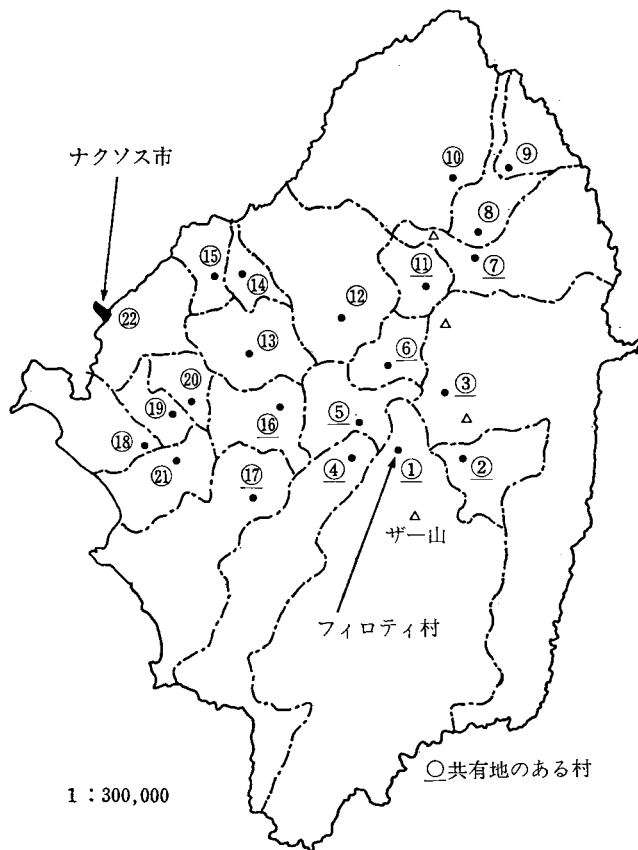
の放牧共有地のあり方や農牧夫の生活形態に焦点をあわせ、現代ギリシャにおける村落共同体の一面をさぐってみることにしたい。⁽⁹⁾

2

一般にキノティス共有地の歴史的起源は、(1)トルコ支配時代からすでに共同体が所有していた土地、(2)独立後、没収されたトルコ人所有地を革命指導者、国、共同体などの間で分割したもの、(3)私人の寄贈や遺贈により共有地に編入された土地、の三つから成るといわれている。⁽¹⁰⁾

フィロティやナクソスの他の村々の共有地がどんな歴史的起源をもつか、その点を説明する資料を得ることはできなかった。だがナクソスの村々の共有地はほとんど灌木しか生えない岩だらけの山岳地帯にあり、山羊や羊の放牧以外に利用不可能な土地であって、独立以前にこれらをトルコ人が所有していた可能性はうすい。ギリシャでトルコ人が占有していたのは、一般に都市や肥沃な平地地帯の土地だったとされているからである。ナクソスのキノティスは、多分これらの土地を革命前からの伝統的な村落共有地としてひきついできたのであろう。⁽¹¹⁾

図1 ナクソス島のキノティス行政区分



ところでそのキノティス共有地は、現在ナクソス全島の村々にどのくらいの規模でどんなふうにも所有されているのだろうか。表1はナクソスの全自治体、つまり二一キノティスと一ディモスのそれぞれの行政領域総面積、

共有地総面積および私有地総面積を示したもので、エルムポリスにあるキクラデス県の県庁から得た資料である。図1はその二一の自治体の行政領域区分とそれぞれの中心をなす集落の位置を図示したものである。

この資料で注目すべきことは、第一に、すべてのキノティスが必ず共有地を所有しているわけではないという点である。二一の自治体中半数以下の一〇キノティスだけに共有地がみられる。しかも共有地をもつキノティスはすべて島の南西側半分に集中し、北東側半分のキノティスは全く共有地をもたない。共有地の有無がはっきり地域的に二分されているのである。この点は、島の南西側には集落を形成する自然的条件に欠け、ナクソス島のほとんどの集落が島の

表1 ナクソス島のキノティスと共有地面積 (単位ストレンマ)

自治体名	自治体総面積	自治体共有地面積	私有地面積	その他の面積
① フィロティ村	93,000	56,000(62.2)	15,600(16.8)	21,400(23.0)
② ダナコス村	10,000	5,900(59.0)	2,900(29.0)	1,200(12.0)
③ アピラントス村	68,000	18,900(27.8)	35,400(52.1)	13,700(20.1)
④ ザマリオナス村	32,000	7,600(23.8)	3,700(11.6)	20,700(64.6)
⑤ ハルキ村	10,000	800(8.0)	2,300(23.0)	6,900(69.0)
⑥ モニ村	6,000	2,700(45.0)	900(15.0)	2,400(40.0)
⑦ コロノス村	22,000	10,200(46.4)	8,100(36.8)	3,700(16.8)
⑧ スカド村	8,000	—(—)	5,000(62.5)	3,000(37.5)
⑨ メシ村	7,000	—(—)	6,000(85.7)	1,000(14.3)
⑩ コロニス村	42,000	—(—)	33,700(80.2)	8,300(19.8)
⑪ ケラモチ村	6,000	1,200(20.0)	2,500(41.7)	2,300(38.3)
⑫ キニダロス村	25,000	—(—)	18,100(72.4)	6,900(27.6)
⑬ メラネス村	12,000	—(—)	6,000(50.0)	6,000(50.0)
⑭ エンガレ村	4,000	—(—)	1,100(27.5)	2,900(72.5)
⑮ ガリニ村	6,000	—(—)	3,100(51.7)	2,900(48.3)
⑯ ボタミア村	10,000	300(3.0)	6,200(62.0)	3,500(35.0)
⑰ サングリ村	28,000	500(1.7)	12,200(43.6)	15,300(54.7)
⑱ アギオス・アルセニオス村	12,000	—(—)	6,200(51.7)	5,800(48.3)
⑲ グリナド村	4,000	—(—)	500(12.5)	3,500(87.5)
⑳ ガラナド村	4,000	—(—)	900(22.5)	3,100(77.5)
㉑ ビブロス村	10,000	—(—)	2,600(26.9)	7,400(74.0)
㉒ ナクソス市	12,000	—(—)	6,200(51.7)	5,800(48.3)
合 計	431,000	104,100(24.2)	179,200(41.6)	144,700(34.2)

*()内は自治体総面積に対する百分率。自治体名に付した①～㉒は図1の行政区分のナンバーに対応する

北東側に集中分布していることに一つの原因があるだろう。そのために北東側の個々のキノティス領域は直径三―五キロのごく小さいものになり、南西寄りの村々は反対に大きな村落領域を占有しえたからである(図1参照)。またナクソスのキノティス共有地はほとんどが山岳放牧地であるが、多少とも草や灌木が育ち放牧にたえる山地は南西側だけに分布している点も関連があるだろう。

第二に、共有地をもたない村も含めて一般に、それぞれの行政領域中に占める私有地の割合がかなり低い点が目をつく。私有地の割合が最も高いメシ村で八五%、最も少ないグリナド村では一三%にも満たず、ナクソス全体でも全島の四〇%ほどを占めるにすぎない。それゆえ自治体共有地をもたない村々にも、国有地など別の公有地がかなりの割合で存在するものと推定される。事実、すべての私有地とすべてのキノティス共有地を合計しても、ナクソス島総面積の六四%にしかならない。また共有地をもつキノティスのうちフィロティ、ダナコス、ダマリオナス、モニ、コロノスの五村では共有地が私有地を

上まわっている。こうしたことの生ずる原因は、ナクソスでは全島の六一％が放牧地、二四％が耕地と圧倒的に放牧地の占める割合が高いのであるが、その放牧地は一般にギリシャでは公有地から成る部分が大きく、したがってそれだけ私有放牧地が少なくなるということにある。全ギリシャの統計でいうと、ギリシャ全土の放牧地の約五四％が公有地になっている⁽¹²⁾。

第三に注目すべきはやはりフィロティ村共有地の大きさであろう。一〇キノティスのうちでもこの村の共有地は群を抜いて大きい。二番目のアピラントス村と比較してもその約三倍に達するし、一村で全キノティスの共有地合計の実に五四％⁽¹³⁾(五六平方キロ)を占めている。フィロティ村共有地をこのように大きくしている要因は、第一にキノティス領域そのものが非常に広く(九三平方キロ)、全島の五分の一以上も占めていることにある。しかも同時にキノティス領域中に占める共有地の割合も一〇村中最も高い六〇％を示しており、文字通りナクソス最大の共有地規模を誇っている。

むしろこの広い共有地は一カ所にかたまっているわけではなく、東西九キロ南北一八キロに及ぶキノティス領

内のあちこちにちらばっている。そこにはフィロティの村人たちの山羊や羊が一万数千頭、一年中放牧されている。その山羊と羊の数は、またしても全ナクソスの三二％を占める⁽¹⁴⁾。山あいのあちこちに一本のステッキを肩にした男たちがたった一人で自分の群の世話をしている。彼らは夏には乳を搾って《ケファロチリ》という堅い大きなチーズをつくって売り、冬には生れてくる小羊や小

山羊を屠って肉を売る。チーズは年間一一〇トン、肉は四〇トンほどがフィロティで生産される。フィロティ村の村長は、村人の収入源の第一位としてこのチーズと肉の生産をあげていた⁽¹⁵⁾。そして村人のこの重要な生活源の大部分を生産する拠点が、ほかならぬフィロティ村の放牧共有地なのである。

3

村の中央広場からやや外れた所にたった一部屋だけの村役場がある。そこには、これまた村で唯一人の常勤の村役人で書記^{ゲラツァフス}(*ypographos*)と呼ばれる事務員がいる。

ここは村役場でもあり、ときに村長と六人の村議員が集って村議会を開く場所でもある。村長と議会(いずれも

無給)は村人の出生、洗礼、結婚、死亡などを記録し、村予算を作成し、村の道路や水を維持管理し、村人の租税台帳を作成するなどの仕事のほか、広いキノティス共有地の管理にも責任を負っている。それゆえ村役場の戸棚には村議会の記録簿や出生台帳、洗礼台帳、婚姻台帳、死亡台帳、男子台帳、戸籍台帳などとならんで、クティマトロギオン(κτυματολογιον)と呼ばれる共有地台帳が保管されている⁽¹⁶⁾。

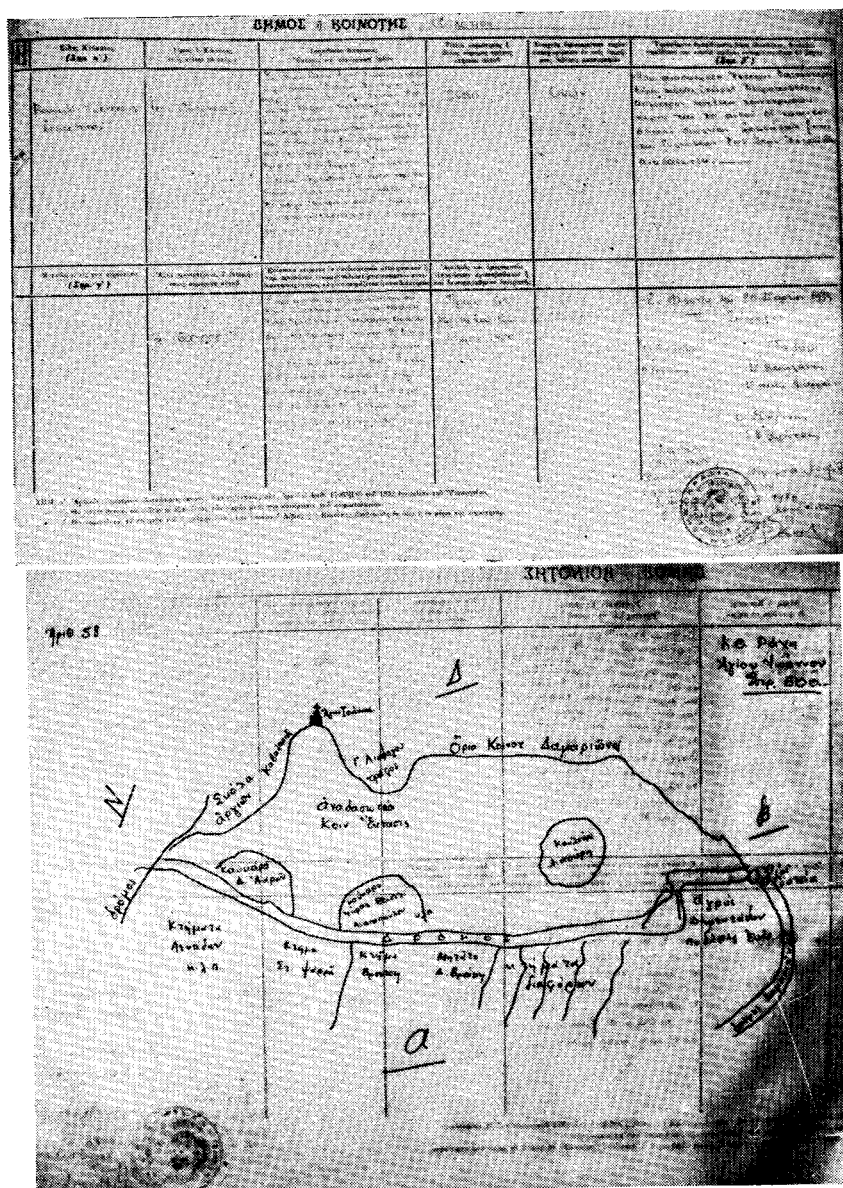
この共有地台帳はキノティスとディモスの行政に関する基本法たる「市村法典」(Δημοτικός καὶ κοινωτικός νόμος)に基づき、共有地をもつすべての市や村が作成する義務を負っているもので、その写しはエルムポリスの県庁にも一冊保管されている。フィロティの台帳は一九三九年に作成されたのだが、その時点では全共有地が六〇筆の土地に区分され、ナンバーを付した六〇葉の用紙に記録されていた。しかし作成後、No. 7、8、57の三カ所の土地は訴訟によって共有地からはずされ、現在の台帳は五七葉五七筆の土地だけを登録している。各葉の用紙の表には所与の土地の(イ)種目、(ロ)面積、位置および境界の叙述、(ハ)評価額、(ニ)他の団体や個人の土地との混

交関係、(ホ)利用目的、などが印刷されたいくつかの欄の枠内に肉筆で記入されている。用紙の裏面には当該共有地の形を示す鉛筆がきの絵図(地図とはいいがたい)が周辺の地名や隣接する私有地名などと一緒に描かれ、余白にはその土地の呼称や面積も記入されていて、中世の絵地図を彷彿とさせる(図2参照)。

土地の種目は一、二例「岩場」とあるのを除けば他はすべて「山岳放牧地」となっている。五七筆の土地はすべて分散しているわけではなく、一つづきの大きな土地が数葉に分筆されている場合もある。だが一筆一筆の土地面積は平均しておらず、最低一〇ストレンマから最高二〇、〇〇〇ストレンマまでさまざまである。また面積は測量されたものではなく村人の概算にすぎず、しかも全体として過大に評価されているから、五七筆の土地を合計すると一〇、三八四五ストレンマになりフィロティのキノティス領域全体より大きくなってしまふ。また土地の評価額は一九三九年のものがそのままになっているから現在では意味をもたないが、一ストレンマ当りの価格になおしてみると集落との遠近や放牧地としての質により大きなひらきがある。標高一〇〇四メートルのザー

(29) ナクソス島の村落共同体

第2図 フィロティ村の共有地台帳から No. 58 葉の表(上)と裏(下)



山一帯をおおう共有地は一ストレンマ二〇ドラクマと安く、集落のごく近くにある放牧地は一ストレンマ最高六〇〇〇ドラクマに評価されている。

共有地台帳の記載項目中最も長文でかつ中心をなすのは、裏面の絵図と対応している当該共有地の境界の叙述で、東西南北のそれぞれで隣接している土地の地名や私有地名などをあげる形で四至が叙述されている。次に多い記載項目は共有地の中に一部私有地が囲い込まれている場合に、その私有地の位置や共有地との混交状態を記したものである。集落のすぐ西側にあり、村人たちが毎日ながめながら暮している「聖ヤンニスの尾根」と呼ばれているNo. 58の共有地を例にとってみよう。この土地の種目は山岳放牧地とされているが、現在は樹木の自然回復のために放牧が禁じられている。面積六〇〇ストレンマで六〇万ドラクマに評価され、最も古くはここに村の墓地があったという記述も台帳中に記されている。この土地の境界についての記述および共有地に混在する私有地等についての記述は次のようになっている。

「聖ヤンニスの山の背に六〇〇ストレンマ。西はダマリオナス村との境まで、南はスカラ・アルゴオンおよび

カバラリージの所まで、北はΘ・グラチア（フィロティ住民の姓）の息子たちの私有地およびデメネア（フィロティ住民の姓）の畑のオリーブの根もとのところまで、また東はもろもろの私有地の外側の道まで（スカラ・アルゴオンから北に向ってアロニス、ブサラス、ブルチス〔いずれもフィロティ住民の姓〕の所有地やミタート、及びその他もろもろの私有地がある）」「この共有地のなかに古い囲い地の跡のような私有地が以下の如く認められている。①アロニスの貝型^カ所有地^カ（καὶκαδο）②B・リアノプロス（フィロティ住民の姓）の後家の貝型^カ所有地^カその他。リアウリス（フィロティ住民の姓）の円形^リ所有地^リ（κοντοῦρα）、同じく聖ヤンニス教会の下にΓ・リオファロス（フィロティ住民の姓）の囲い地があるが、他方、共同^{シニ}所有地^{シニ}（συνιδεκτηρία）〔フィロティ村と私人との共同所有のこと〕は全く認められない」（図2参照）

五七カ所の共有地はすべてこんなふうに周辺の沢山の地名や私有地名によって叙述されている。だがフィロティ村の地図の上にこの五七の共有地を精確に置いてみるという作業は不可能だった。まともな地図がないだけでなく、村人たちは個々の共有地の所在を自分の目と足で

知っているとはいえ、それが村の地図上のどこに位置するかといったことは知る必要も関心もないからである。フィロティ村の領域の地図を拡大し、その地図上に個々の共有地のおおまかな位置だけでも示してもらおうと努力したが、すべて徒労に終わった。一つの共有地の名をあげて村の地図を示しその場所を聞くと、村人はきまっぴ私を戸外に導き、山のかなたを指さしながら、あの道をラバで何時間行きどこをどう行くのだと教えてくれるのである。

4

フィロティはギリシャの村落に一般的な一村一集落の集村で、狭い山あいの二つの丘の斜面を這い上るように、沢山の白いしつくいぬりの家々がたちならんでいる。われわれが滞在した一九七七年には、推定で三二〇―三〇世帯の住民がここに暮っていた。そのうちの三分の一弱、およそ一〇〇世帯の村人は山羊と羊の放牧を主たる生業にしており、他の村人から《ボスコス》(*Bozköy*)というやや侮蔑的な響きのある語で呼ばれていた。だが彼らの多くは家畜以外に多少ともオリブ畑やブドウ畑、あ

るいは家畜飼料用の大麦をまく小さな耕地なども所有しており、決して専業の牧夫というわけではない。電話帳でフィロティ村のボスコスたちの名前を捜してその職業表示を調べてみると、牧畜を生業としない一般の《農民》(*Yereliler*)と区別して、彼らには《農牧夫》(*Yereliler*)という複合名詞があてられている。なるほど牧夫でも農夫でもなく、その両方だというわけである。

とはいえ彼らの本業はやはり牧畜である。牧畜が彼らの主たる貨幣収入源であり、農業の方は自給的性格のものか、せいぜい補助的収入源だからである。それは、農業を本業とする一般の農民が自家消費用に若干の山羊を飼っているのとちょうど逆である。ナクソス市にある農業銀行から得た資料によれば、フィロティには一一、一〇〇頭の山羊と七一〇〇頭の羊が飼われている。村のほとんど全ての家族は自家用のミルクやときにはチーズを自給するために、それぞれ数頭の山羊や羊を集落の中で舎飼いしている。その数は山羊が合計一、一〇〇頭、羊が七〇〇頭だから、フィロティ住民は一世帯平均五―六頭の自給用家畜(これを *oikouria* と呼ぶ)を持っていることになる。舎飼いのこの自給用家畜を除いた山羊

表2 フィロティ村共有地放牧税台帳 (1977)

	共有地利 用者氏名	家畜放 牧頭数	基礎控 除頭数	150頭ま での単価	1頭6ドラクマ で支払う頭数	1頭7ドラクマ で支払う頭数	150頭まで の放牧税	150頭を越え る分の放牧税	放牧税 合計
1	A	180	5	6	145	30	870	210	1,080
2	B	80	5	6	75		450		450
3	C	80	5	6	75		450		450
4	D	60	5	6	55		330		330
5	E	110	5	6	105		630		630
6	F	550	5	6	145	400	870	2,800	3,670
7	G	120	5	6	115		690		690
8	H	200	5	6	145	50	870	350	1,220
9	I	130	5	6	125		750		750
10	J	130	5	6	125		750		750
93	Z	30	5	6	25		150		150

* 各欄は大家畜、小家畜の小区分を含むが大家畜は皆無なのではぶいた。

一〇、〇〇〇頭と羊六、四〇〇頭、これが牧畜を本業とする農牧夫たちが山に放牧している家畜（これを *poljevac* という）である。ボスコスたちの数を仮に一〇〇世帯とすれば、一世帯平均一六四頭の群を所有していることになる。

ボスコスたちは山羊と羊一頭につき年六ドラクマ（約四二円）を村に支払い、保有する家畜の大部分を共有地に放牧している。⁽¹⁷⁾ 村長と村議会は毎年ボスコスたちの申告に基づいて、彼らが何頭の群を共有地に放牧しているか、したがってそれぞれ村にいくらかの放牧税を支払わねばならないかを一覽表にした放牧税台帳を作成し、これを県に報告している。村は独自の出納事務所をもたないので、ボスコスたちは年に一回ナクソス市にある郡の出納機関に放牧税を納めるが、これは村の数少ない独自財源の一つになっている。一九七七年の放牧税台帳は、村議会の記録簿のなかの「決議第四四／七七、放牧家畜頭数別課税」という表題のついた文章の末尾に一覽表にして記録されていた。表2はこの課税台帳の最初の部分を人名だけ記号化してその形式を写したものである。以下この台帳について簡単に検討しておくことにしよう。

台帳はまず共有地を利用してボスコスたちの姓名をアルファベット順に登録している。すべて男子名で合計九三人だが同一人がダブってあげられることはないから、これは一九七七年時点で共有地を使っているボスコスの世帯数を示している。⁽¹⁸⁾ われわれの質問に答えて村長はフィロティの農牧夫の数を一〇五としたが、何を根拠

にした数字かは明らかでない。台帳の九三名は共有地利
用者だが私有放牧地だけを利用している者が皆無とは考
えにくいし、村長の示した数字も考慮に入れば、フィ
ロティには全体で一〇〇世帯前後の牧夫がいると考える
のが妥当だろう。

ボスコスの姓名に次いで彼が共有地に放牧している家
畜総数が示されている。小家畜(小羊や羊)と大家畜
(ラバやロバや馬や牛)とに区分されているが、大家畜
の放牧は皆無である。一世帯当りの最大放牧数は五五〇、
最小は二五頭だが最も例の多いのは一〇〇—二〇〇頭程
度で、平均一世帯当りでは一四〇頭である。三〇〇頭以
上が六人、一〇〇頭未満が二六人いる。共有地放牧総数
は一二、八四五頭で先に挙げたフィロティの全放牧数に
三、五〇〇頭余り足りないが、その差は私有放牧地等の
分と考えてよいだろう。だが各世帯別の共有地放牧頭数
は各人の申告に基づいており、実際の数より少な目にな
っている可能性は充分にある。また私有放牧地を平行利
用しているボスコスもいるだろうから、いづれにせよ台
帳の数字は彼らの実際の家畜保有数を示すものではない。
つづいて課税対象から外される家畜の基礎控除数五頭

(大家畜は二頭)が全員の欄に記入⁽⁹⁾され、同じく一頭当
りの放牧料が一律に六ドラクマ(大家畜は三ドラクマ)
とされている。さらに次の欄には被課税頭数、つまり当
該牧夫の放牧数から基礎控除数五を引いた数字が書き込
まれ、これに六倍して得られる放牧税額が最後の欄に計
算されている。但しこの税金は一種の累進課税になって
いて、一五〇頭を越える家畜については一頭七ドラクマ
が徴集されるから、一頭六ドラクマが該当するのは一五
〇頭以内の家畜を放牧している者だけである。例えば八
〇頭の人の税額は $6 \times (80 - 5)$ ドラクマだが、一八〇頭
の牧夫は $6 \times (150 - 5) + 7 \times 30$ ドラクマを支払うことにな
る。かくて最高五五〇頭を放牧しているバシラキスは
三、六七〇ドラクマ、二五頭だけのマニョスは一二〇ド
ラクマを村に支払い、村は放牧税として合計七九、〇一
〇ドラクマを受けとる。

この放牧税は一九七七年の村の財政収入予算の一・九
%にしかならない⁽²⁰⁾。現在のギリシャの村や市の財政上の
オートノミーは低く、国からの援助部分が圧倒的に多い。
それゆえフィロティの放牧共有地は村の財政上重要な
ではなく、村人口の三分の一近くを占める《農牧夫》た

ちに安い生産手段を提供し、一定の貨幣収入を保障している点でこそ重要なのである。ボスコスたちの都市流出は他の階層に比べて少ないのではないだろうか。

5

フィロティの集落は島のほぼ中央にあるが、南北に長いこの村の行政領域のなかでいうとその最も北のはずれに位置している。広いキノティス領域はしたがって集落の南側に展開しているのだが、そこはロバやラバの背にまたがって往き来する細い山道が何本か通じているだけの荒涼たる山岳地帯である。村人はこのような部分を辺鄙(ἄγροί)と呼んで集落を表わすホリオ(ἑλίοιο)に対比させている。このエクソヒーに最も日常的な結びつきをもっているのは、むろんボスコスたちである。村の非農業的な住民たち、例えば鍛冶屋や靴屋やパン屋や雑貨商やカフェニオン経営者や事務員や僧侶や寺男や小学校教師や労働者等々(こうした住民は少なくとも七〇—八〇世帯をかぞえる⁽²⁾)は、年間を通じてこの地域に出かけることはほとんどない。また一般の《農民》たちはそこに多少のオリブ畑をもつことがあるにしても、ラバで

片道三—四時間もかかる場所をそう頻繁に訪れることはできない。だがボスコスにとってはこのエクソヒーこそが本来の仕事場であり、山羊や羊たちと一年間のほとんど半ばを過ごす場所なのである。妻や子が暮しているホリオの家のほかに、彼らはエクソヒーのなかにもう一軒の簡素な出作り小屋をもっている。ミタート(μυτάρτο)と呼ばれるこの石積み的小屋は彼らの私有地にボツンと一軒だけ建てられていて、その敷地はマンドラ(μάνδρα)という高さ一米ほどの石積み塀に囲まれている。彼らはこのミタート近くの共有地に自分の群を放牧し、この小屋を根城に家畜の世話をするのである。週の半ばをミタートで山羊たちと過したボスコスは、あとの半分を自分の家族と過すべくラバにまたがり村の家にもどってくるというわけである。

われわれもある一日バシーリーという老人に案内されてラバに乗り、村から三時間のエクソヒーに出かけた。その目的地でムスタキスという姓のボスコス三兄弟と知りあった。最後にこの兄弟に例をとり、ボスコスたちの生活の具体的なあり方に触れておくことにしよう。

バシラキス(五〇才)、ステファノス(四八才)、ディ

ミトリオス(四一才)の三人は皆フィロティで生れ育った。父もボスコスだったし、一人の妹も同じくフィロティでボスコスの嫁になっている。パシラキスの二人の息子もボスコスなら一人の娘もボスコスと結婚してフィロティで暮している。三人はそれぞれフィロティの娘と結婚し、妻がブリーカ(嫁資)にもってきた家に住んでいる。両親の家は妹がブリーカにもっていった。⁽²²⁾三人は父親からビルゴス・ヒマール(村から三時間のエクソヒー)にある五〇〇ストレンマの土地と三〇―四〇頭ずつの群を相続した。そこには三〇〇本ほどのオリブ畑もあり、いちじくやアーモンドの樹もあるがその他の畑はない。この土地は現在三人で平等に共同で利用している。三人はまたここにミタートを持ち、家畜用の雨水をためる貯水槽をつくって共有している。⁽²³⁾

現在三人は合計五〇〇頭の山羊と羊の群を共有している(これは長男バシラキスの言。放牧税台帳では長男二〇〇頭、次男二〇五頭、三男が一〇〇頭と分けて登録されている)。羊と山羊は半々ぐらいである。チーズも三人共同で作り平等に分ける。チーズの生産量は年によって変化するが、一人当り五〇〇―七〇〇キロぐらいで、

昨年は五〇〇キロだった。チーズの売価は春にはキロ当たり一〇〇ドラクマ、夏から冬にかけては一五〇ドラクマくらいになる。肉は年に一、〇〇〇キロほどで一キロ一五〇ドラクマである。山羊や羊の皮は一枚一二〇―一五〇ドラクマするが、肉の買付業者は肉として一括して買い取っていく。チーズや肉の買手はホーラ(ナクソス市)やアテネからやって来て何人ものボスコスから買付けていく。村の商人テオナスも買う。そのほか羊の毛も毎年三〇〇キロをキロ当り三〇ドラクマほどで売るし、肥料用に山羊や羊のフンもキロ二ドラクマで毎年自動車五台分を売っている。

放牧にはビルゴス・ヒマールに近い共有地を一、〇〇〇ストレンマほど利用している。放牧税は三人で、三、〇〇〇ドラクマほどを支払っている(一九七七年の台帳)。共有地のほかにもコツアーキス(村近くの採石場で働く労働者)から一〇〇ストレンマの畑を借り、そこに家畜飼料用の草を播いている。放牧地の草だけでは不足するからである。コツアーキスには借地料として年に一、〇〇〇ドラクマ支払っている。

一年を通してずっと仕事はあるが、特に春から夏にか

けてのチーズ作りの頃はいいそがしい。島では九月頃から家畜の早い出産が始まり一月頃まで続くので、マンドラを修理したり家畜のお産のめんどうを見たりする。一二月には生れた子山羊や子羊の肉を売る仕事がある。チーズ作りは二月から九月頃までつづくが最も盛んなのは二―四月である。この頃に忙しくて二カ月間ぐらいミタートに居つづけ、村には帰らない。毎朝三人の群からガラ(ミルク)を搾って皆一緒にあわせ、カザーニ(καζάνι)という大きな釜で煮てかため、チロポリ(τυροπόλι)という細い植物の茎で編んだ型にはめて堅チーズをつくる。余り忙しくない時期にも三人は交代で週のうち半分はミタートですごす。

以上にみてきた通りこのムスタキス兄弟は三世帯で五〇〇頭の群、したがって一世帯当り一六〇頭余りを所有するフィロティの平均的なボスコスである。父から継いだ私有地に一世帯当り一〇〇本ほどのオリブ畑があるから《農牧夫》にはちがいないが、年間労働の大部分は牧畜に使っている。村に帰っている週の半分ぐらいの間に何か賃仕事のようなものに就いている様子もないから、貨幣収入は牧畜によるものが全てであろう。大雑把に計

算してみると、チーズ、肉、羊毛などによる一世帯当りの年間収入は約一〇万ドラクマ(七〇万円程度)で、貧しいがなんとか暮していける金額である。そしてそのことを可能にしているのは共有地利用によって非常に安い飼料が確保され、したがって安い生産費ですんでいるからである。そのことは私有牧草地の地代がたった一〇〇ストレンマで年間一、〇〇〇ドラクマにもなることと比較すれば明白である。彼らはフィロティというキノティスに所属し、そのメンバーがもつ権利の行使によってはじめて自分たちの生活をささえているのである。

(1) *Γεωργικὴ, βιομηχανικὴ καὶ κτηνοτροφικὴ ἐξέλιξις τῆς Ἑλλάδος, 1821—1971*. T. 3, ἐνὸς Μυτιλήνης Χωλικαράκη (Εδμεύου Κέρπου Κοινωτικῶν Ἐρευνῶν), Ἀθήναι 1976, σ. 293. 以下本文中に示す人口等はいずれも一九七一年のナクソスによる。

(2) A. E. Bakaloudiou, 'Ιστορία τοῦ νέου Ἑλληνισμοῦ', T. 2, ἐκδ. 2, Θεσσαλονίκη, 1976, σ. 326—331 (Κοινότητες); V. Styrocras, *The Greek Village. Historical Elements in its Evolution*. Athens 1975, pp. 8—13.

(3) ナクソス島でも裁判官や徴税官以外に合計五―一〇家族のトルコ人が居ることは稀だったといわれる。一七五四年における現ナクソス市の人口構成は、カソリック信者三

- 二四(と聖職者一四)人、オーソドクス信者三〇一六(聖職者三四)人、ユダヤ人二八三(三)人、アルメニア人二二(一)人、トルコ人一六(〇)人となっている。J. M. Melioyrou, 'H Náfios, *ibid.* 3, Náfios 1968, p. 197-199.
- (4) 一つはホーラ(現ナクソス市)のオーソドクス信者、アルメニア人、ユダヤ人の共同体、もう一つは同じくカソリック信者の共同体、他の一つが島の内陸の村々の共同体である。V. Styroeras, *The Greek Village*, p. 10; J. M. Melioyrou, 'H Náfios, *ibid.* 3, 199.
- (5) キノティス及びディモスの行政制度についてはやや古くが H. F. Alderfer, *Facts on Greek Local Government*, Athens 1950 に詳しい。
- (6) ある村がキノティスとして認められるための一般的条件は人口が三〇〇人以上であることと小学校を一つ備えていることである。
- (7) 現代ギリシャの村落の典型は集村で、ナクソス島でも二一キノティスのうち一〇キノティスは一村一集落である。全ナクソスの集落数(*óikismoi*)は五二だから、平均すると一キノティス当り二・三集落、全ギリシャ平均では一・九集落である。
- (8) むろん小さなキノティスでの通婚圏は周辺のいくつものキノティスを包み込んでいる。例えばバシリカ村の場合がそうである。E. Friedl, Vasilika, *A Village in Modern Greece*, pp. 48-74.
- (9) 以下の検討で用いる主な資料は、(イ)県知事、村長に提出した質問表への回答、(ロ)ナクソス市の農業銀行や農協からの資料、(ハ)村役場に保管されている文書類、(ニ)個々の村人へのインタビューによって得た個人生活についての資料、(ヘ)文献などである。
- (10) *Facts on Greek Local Government*, p. 74.
- (11) 独立革命後一八三三年に成立したオトンの政府は全土をノモス・エバルヒア・ディモスの三段階に区分し、ディモスはいくつかの村を恣意的に寄せ集めて構成し、村を独自の行政単位として認めなかった。事実フィロティ村も一八三六—一八四五年には東側の隣り村のピラントスとともにアピラントス市を構成し、一八四五—一九一二年には西側の隣り村ハルキを中心とするトラゲア市に組み入れられていた。だがディモスを構成する村々は実質上村落共同体としての自立性を保ちつづけ、一八三三年の法律『ディモスの形成および区分について』(第六条)も、ディモスを構成する村々が従来から所有する共有地の所有主体たることを認め、この法律に基づく内務省令は共落共有地を管理する村の委員会の選出について規定している。一九二二年以後はフィロティなど大きな村々はキノティスとして自立した。Facts on Greek Government, pp. 5-6.
- (12) *Óikismoi kai koinotites étas tis 'Elládas*, 'Athina, 1964, p. 319.
- (13) 一メートル²(στέμματα)は古くは一、二七〇平方メ

ートルだったが、現在は一、〇〇〇平方メートルに等しい。

(14) フィロティの農業人口が全ナクソス農業人口に占める割合は約一割だが、フィロティの農産物で全ナクソスの生産頭の一割を超えるものはオリブ油(一八%)、肉(一七%)、チーズ(一九%)だけである。

(15) 村長が示した村の収入源の順位は、(1)チーズと肉の生産、(2)オリブ油の生産、(3)アテネ等からの送金、(4)年金、(5)貸銀、(6)果実や野菜の生産の順であった。

(16) 表題は以下のようになっている。Καύτης Φιλότης, Βεβλιν κτηματολογίου καταγραφέν το έτος 1939.

(17) フィロティ村民でない他村の者がフィロティ村共有地を利用する場合には倍の十二ドラクマをフィロティに支払う。他村の利用者はわずかである。

(18) 九三世帯中、ムスタキス姓が一九世帯、バシラキス姓一四、プロボナス姓一〇、マニョス姓九、その他が一―五世帯に分布して一定の姓に集中しているが、これはフィロティ村の全体の姓の分布とほぼ比例していて農牧夫が一定の姓にかたよっているわけではない。

(19) 一世帯五頭の控除は、村人のすべての世帯が平均五―六頭の自家消費用家畜を飼っていることに関係しているのではないかと思われる。村人はこの *oikoteta* を朝早く村近くの畑や付近の山に放ち夕方また村につれもどして小屋などに入れる。

(20) フィロティ村の一九七六年度の財政支出は 2,649,441

ドラクマで収入は 2,251,041 ドラクマである。収入の内訳は、放牧税 45,022⁷、農産物卸売税 11,429⁸、電気水道利用負担 12,077⁹、ビール税 11,492¹⁰ ドラクマのほか国庫援助等が実に 2,170,346 (96.4%) ドラクマを占めている。

(21) 農民、農牧夫以外の主たる職業をあげると、木工大工 2、鍛冶屋 2、ブリキ屋 2、靴屋 1、仕立屋 2、パン屋 2、床屋 2、肉屋 4、食料雑貨 9、タベルナ 3、コーヒー店 3、タバコ屋 5、行商人 2、石工(建設業) 10、オリブ圧搾工場 2 (内一は共同経営)、採石場経営 1、塗装工 6、電気工 3、ガレージ 1、医者 1、郵便局員 3、農業ボリス 2、村役場書記 1、村の給水係(臨時傭) 2、寺男 1、僧侶 2、小学校教師 2、事務員 10、ラバ運送業 10、等々である。

(22) ギリシャ農村では一般に家と若干の畑が嫁資となる。(23) 夏はほとんど雨がふらないのでミタートには冬の雨水をためる家畜用の貯水槽(*Seftenia*)がある。ムスタキス兄弟のものはコンクリート製で長さ一五米、幅四米、深さ三・三米である。

(宇都宮大学助教授)

* 本稿は昭和五十二年度科学研究費補助金(海外学術調査―現地調査)「地中海の島嶼における文化交流の影響」および昭和五十三年度科学研究費補助金(海外学術調査―調査総括)「地中海島嶼における都市・農村生活の構造の分析と島嶼及び外部社会の交渉の機構の研究」による研究成果の一部である。